



## フィールドワークで南吉記念館へ

バスにのってみんなで新美南吉記念館へ行ってきました。目的は、プロジェクトでデジタルブックを作る参考にするためです。

愛知の偉人で、有名な童話作家である新美南吉から、物語作りの秘密をたくさん学んできました。

国語の授業で、南吉の代表作「ごんぎつね」を読みましたが、ごんぎつねの舞台は南吉の生まれ育った場所が舞台だとされています。空想だけでなく、自分が実際に見て、子ども時代に体験したことを物語に組み込むことで、子どもを惹きつける童話を作り上げることができたと言われています。



また、学芸員さんの方から、南吉が意識して悲しい物語を書いたこと、ただ悲しいだけでなく、その悲しさが愛に変わっていくことなどを教わりました。

フィールドワークで学んだたくさんのことを、ぜひこれからの物語作りに活かしてほしいです。



【向こうにごんのいた山（のモデル）があります】



【兵十がうなぎをとっていた川をしっかりと記録】



【新美南吉の生家、とても小さいです】



【ごんぎつねのジオラマを見つめる表情がいいですね】



【記念のスタンプ、大人気でした】



【南吉童話は私も大好きです】



【いい記念写真ですね、とってもかわいいです】



【ここに来たことは大きくなってもきっと忘れません】

やる気満々の子どもたちは、「ここに来てよかった!」「あれが兵十が魚とってた川か!」とつぶやきながら、前のめりにフィールドワークに取り組んでいました。

また、このフィールドワークを計画・実行してくれたのが前地先生だと伝えと、その後本人のところまで行って、「先生、ここに連れてきてくれてありがとうございます!」「ここにこれてうれしいです!」と伝えていました。

やはりこういった人柄のよさは、2年生のもつかけがえのないよさですね。

## 南吉の言葉たち

やはり、ストーリーには、悲哀がなくてはならない。悲哀は愛に変る。(中略)俺は、  
悲哀、即ち愛を含めるストーリーをかこう。(昭4・4・6 日記)

これらは南吉が残した手記にあった言葉です。記念館の学芸員さんが教えてくれたことは、この言葉からきたのでしょうか。ごんぎつねをはじめ、南吉童話は悲しさによって心震えるお話がたくさんあります。子どもたちは深い悲しみの中から愛を学び、心を豊かにしていくのかもしれない。

こんな風景は依然ちっとも自分の感興を起さなかったが、近頃はこんなありふれた身近なものを美しいと思うようになった。ごく平凡な百姓達でもよく見ていれば誰もが書いた事のないような新しい性格をもっており、彼等の会話にはどの詩人もうたわなかったような面白い詩がある。(昭12・2・4 日記)

南吉が身近な場所やものを物語の題材にするようになったのは、この心境の変化からでしょう。ともすれば、ファンタジーの世界に傾倒しすぎてしまう現代の子どもたちに、このようなありふれた身近なものを美しく思い、平凡な人たちのやりとりを面白いと思える感性に触れさせてあげるとは、とても大切なように思います。

ずっと前に作った創作童話「大男の話」を子供にしてやった。ひそひそと泣く子があった。私はうれしくなった。私の頭が作りあげた話が、子供の美しい涙に価するのが。  
(昭6・4・17 日記)

ここにある「大男の話」というのは、私が一番好きな南吉童話です。ごんぎつねと同じように、悲しいのだけれどその悲しさが愛に変わるお話で、心が震えます。

泣きそうになる子がいるのはもちろん、クラスの子に気持ちを込めて読み聞かせしていると、自分も泣きそうになってしまうことがあるくらいです。

以下から全文を見ることがができますので、ぜひご覧ください。声に出しても10分程で読み終わり、読み聞かせにも最適です。本当にいいお話で、絶対におすすめです。

[https://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/3313\\_10260.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/3313_10260.html)